■ 散歩芸 ■

Journal of Negative Results

江橋節郎*

新しい発見というものは，研究者の生きがいには違いないが，それに至る過程には，その何倍も何十倍もの失敗が重ねられているのが常である．一将功成って万骨枯るということがよくいわれるが，研究者個人についても同じことがいえる．つまり一日功成って万日隠るというわけである．科学の発見は，本来確率的なものであり，平たくいえば，ギャンブル的要素を多分に含んでいる．科学の研究が多くの人々を魅了する秘密は，案外こんなところにあるのかもしれない．

ところでそういった無駄というものは，科学者の個人的な見栄も手伝って，情報として表面に出にくいものである．気の合った同士で話していると，「お前もやったか」とお互いに苦笑することがしばしばである．どうも人間の考え方というものは，科学の原理とは微妙に食い違っていて，だれも同じような間違いを冒すものらしい．そういう失敗や，思い違いのなかで，多少とも意義のありそうなものは，なんらかの形で公表するのが，むしろ科学者の義務ではないだろうか．

これが，上記ジャーナル提唱の主旨である．実は，このことを言い出してから20年余り，一時はかなり熱を上げたが，たいていの方がジョークと思って真面目に取りあってくださらない．忘れかけていたところに，この散歩道へのお誘いがあり，貴重な誌面をネガティブなお話で塞ぐこととなった次第である．

ところで，一体どんなジャーナルになるのだろうか．まずタイトル（上記は和製英語）を選ぶ．いかにネガティブでも，無条件に全投稿を採択するわけにはゆくまい．やはり適当な編集委員を選んで審査を行わねばならないが，その人選はいろいろな意味で難しい．しかしこのジャーナルの死命を制する問題である．論文の大部分は，抄録程度の短報でよいかもしれないが，時にはきっちりとした正論文が必要となる．誌上の匿名は認めるが，その場合にはその論文のプライオリティは認めないこととする．ネガティブ・データにプライオリティというのもおかしな話であるが，有名なマイケルソンの光速度の実験のように，ネガティブな結果が，重要な意義をもつ場合も少なくない．匿名の場合には，編集者は読者のなかの希望者と著者の間の文通を仲介する必要がある．

困るのは，このジャーナルに載った報告を他人が追試したら，ポジティブに出た場合である．結果がネガティブでも，その実験の計画のなかに，それまでだれも思いつかなかった新しいアイディアがあった場合，それにプライオリティを認めるかどうかは，微妙な問題である．せっかくネガティブなデータを提供していただいたのだから，編集者としてはその著者にできるだけのことはしなければなるまい．一般的にいって編集者の責任は，普通のジャーナルよりずっと重くなりそうである．

学位論文には新知見のあることが原則である．ことに論文博士（大学院の課程を経ずに提出された論文）の場合にはこのことが強く要求されている．新制度の下でも，医学関係には依然として論文博士の制度によるものが多い．2，3年の研究に新知見ということを要求すること自体無理な話で，つまりは結果の見えすいたテーマを選ぶことになる．初心忘るべからずというが，こんな初心が一生を支配することになったらたいへんである．それよりも，本格的な問題に真正面から取り組んだものには，たとえ結果がすべてネガティブであっても，学位を与えることにしたらどうか．追試まがいの新知見——猫を犬に換えただけというような——よりは，よっぽどましだと思うが．

世は行革時代ということで，外部からは，「無駄な雑誌」はもちろん，無駄な研究などは許し難いという声も出よう．しかし研究の効率を上げようというので，一人前の研究者が結果の見えすいたことだけを研究するようになってはたいへんである．研究に無駄は避けられない．その「無駄」を無駄にしないことが大切なのである．

* えばし・せつろう（1922年生）
東京大学医学部，理学部・教授．東京大学医学部医学科卒．医博．
研究課題：筋収縮，特にその調節機構．受賞：山路自然科学奨学賞，朝日文化賞，恩賜賞，日本学士院賞，文化勲章．